【85】

氏　名（本籍）	辻（つじ）　朋季（ともき）（愛知県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　5236　号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**ドイツにおける日本学の眼差し** －カール・フローレンツの日本「賞賛」に潜む「蔑視」の構図－

主　査	筑波大学教授	Dr. Phil	畔　上　泰　治
副　査	筑波大学教授	文学博士	川那部　保　明
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	武　井　隆　道
副　査	筑波大学准教授		濱　田　　真

論文の内容の要旨

本論文は、ドイツにおける日本学創始者のひとりカール・フローレンツの研究業績や発言に含まれる日本「賞賛」の言説を批判的に分析し、その背後に、自己優越感の裏返しとしての「他者に対する見くびりの視線」という意味での「蔑視」の姿勢が存在していることを明らかにし、これまでの異文化研究における問題点と新たな方法論の確立に向けた学術的知見を提示することを目的としている。本論文は、序章に続く五つの章と終章から成っており、第一章が先行研究批判と分析枠組みを構築するための理論的考察の検討に、第二章が日本学と植民地主義との制度史的な側面に関する研究に、第三章から第五章までが文献分析を通した、フローレンツの研究業績に潜む「蔑視」の検証に充てられている。

まず序章では、思想家フランツ・ファノンの著作をもとに、文化的背景を異にする他者に対する賞賛の言説を解釈する際の問題点を指摘し、本論文の基本を支える方法論的予備認識が提示される。次に第一章では、先行研究の紹介と批判が展開される。その中で論者は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』がドイツの事例を考察対象から除外したという問題点を踏まえて、異文化を「賞賛」する言説を批判的に検証する意義とその分析方法の枠組みを提示する。第二章は、フローレンツが行った日本「賞賛」言説を分析するための予備的作業として、ドイツにおける日本学の制度史的な発展過程を、植民地主義との関わりの中で明らかにしている。また日本研究という営為と植民地主義とがどのように結び付いているのかという問題について、ズィーボルトを例に論じている。第三章以降では、フローレンツが行った日本研究の諸業績が具体的に分析される。第三章では、とりわけ近年注目されている「文化の翻訳」という問題点を視野に入れつつ、文学作品の翻訳にともなう問題が、とりわけそこに潜む言語的・文化的権力関係の観点から批判的に考察されることの重要性が、フローレンツの翻訳業績を例に論じられている。即ち、フローレンツが出版した『詩人の挨拶』をめぐって、上田萬年とフローレンツとの間で繰り広げられた論争における両者の主張の分析を通して、フローレンツが西洋中心主義的な姿勢の下で日本詩歌を価値付けていたこと、即ち、フローレンツがゲーテやシラーを普遍化し、それを以ってドイツ文化の中で日本文学を価値付け、自己の翻訳理論を正当化していたことを挙げ、そこから、フローレンツの表向きの日本賞賛には「蔑視」が潜んでいた、と論者は結論付ける。続く第四章で論者は、上田とのこの論争前後のフローレンツの業績を分析し、フローレンツは

来日初期においても、既に同様の「蔑視」を意識下に持っていたこと、またフローレンツは上田の批判を一部で受け入れながらも、基本的にはその後も西洋中心主義的な態度を改めようとしなかったとの知見を提示する。第五章では、論者はまずフローレンツと、彼の師ルドルフ・ランゲとの論争を取り上げ、この論争ではフローレンツが、かつての論敵である上田の協力を得て優位に議論を進めていたとの認識を示す。そして、フローレンツと上田は激しい論争後も文化的価値観に関して相互理解を経ないまま、互いの権力を利用し合うような戦略的な相互補完関係を保ちながら自らの地位を築いていったとの知見を示す。次に、上田との論争後に公刊されたフローレンツの著作『日本文学史』が分析され、ここでも、日本の文化や民族に対する賞賛の記述が、西洋文明を頂点とする価値観を前提に展開され、日本に対するフローレンツの「蔑視」の視線が連続して残されているとの見解が示される。論者は最後に、1914年に行われたフローレンツの講演『ドイツと日本』を分析し、これまではフローレンツの「日本びいき」の証左と見なされ、また日本擁護と理解されてきた発言や、イギリスを批判する彼の言説を詳細に検証し、それらの発言の中にこそ、日本に対するフローレンツの「蔑視」が顕在化しているとの新たな知見を提示する。

本論文の成果をまとめた終章では、本論文が明らかにした賞賛と「蔑視」の表裏一体の構図が、たんにドイツにおける日本学の問題として扱われ得るのではなく、それは文化を異にする他者に対する認識のあり方をめぐる諸問題の一つとして、広く論じられ得る問題であるとの見解が提示される。またこの問題性が、学術的議論の場においてのみならず、日常生活の場においても共有され、個々人が他者認識のあり方を常に問い直していく必要があるとの提言がなされる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ポストコロニアル研究の問題意識と研究方法を踏まえ、ドイツにおける日本学成立期の問題点を、カール・フローレンツを中心に考察した野心的な論考である。論者はフローレンツに関するこれまでの先行研究を批判的に踏まえながら、日本およびドイツにおいて収集・閲覧した豊富な資料を入念に分析し、フローレンツが行った日本研究の基本的な視座の特徴と問題点を明快に歯切れ良く論じている。

論者はまず、文化研究におけるエドワード・サイードの方法論において欠落している問題点を指摘する。即ち、自集団の文化がより高い価値を持つという、文化的落差意識が存在している場合においては、研究対象に対する否定的な言辞のみならず、肯定的な評価や賞賛の言辞にさえも蔑視の視線が含まれ得るとの認識をもとに、こうした観点に立った文化研究はこれまで十分にはなされてこなかったと指摘している。本論文はまず、文化研究における方法論にこうした新たな学術的視座を提示したという点において高く評価される。

論者は、文化研究を目的として成立・発展してきたとの一般的な認識が強い、ドイツにおける日本学、さらには東洋学がドイツの植民地主義と全く無縁なものではなかったことを、ズィーボルトの活動やベルリン東洋語学校、ハンブルク植民地研究所、ライプツィヒ大学、「ドイツ東洋文化研究会」（OAG）等における日本研究の制度的・人的側面を中心とした分析から明らかにし、新たな学術的な知見を示している。

本論文の中心的な研究対象であるカール・フローレンツを分析するために、論者は数多くの一次、二次文献を使用している。論者はこれらの資料を収集・閲覧するためにハンブルクやベルリン、ライプツィヒ等の大学図書館や資料館に自ら赴き、あるいは東京大学等国内の図書館の奥深くに収蔵されている古い資料を直接調査するなど、論文執筆のための基礎調査に対して膨大な時間と真摯な努力を費やしている。それらの文献は本論文における論者の主張を裏付ける重要な資料として論文全体において十分に活用されている。このように、自らの研究に対して論者が示した強い熱意は、研究者としての今後の論者の姿を示すものとして、高く評価できる。

本論文において論者は、フローレンツの翻訳業績として『詩人の挨拶』、『寺子屋・朝顔』、『孝女白菊』等

を、また主著『日本文学史』を考察の主要対象としている。その際に論者は、保持する高度なドイツ語力を十分に活かして翻訳と日本語のオリジナル作品とを詳細に比較・分析し、新たな学術的な知見を導き出している。同時にまた、フローレンツと上田との論争を分析する際には、論者は『帝國文學』等を直接検証し、またこれまでのフローレンツ研究においては十分には参照・言及されてこなかったその他の原典資料を紀要や学術誌などの中から地道に収集し、また丹念に分析し、そこに記されている上田の論評を論争全体の文脈の中から把握しようと真摯に努めている。その結果、これまでのフローレンツ研究における佐藤マサ子らの先行研究に対して、その誤謬の指摘、さらには新たな知見と分析視点を提示することに成功している。このように、研究対象に関する文献収集に示された熱意や、客観性のある主張に向けた分析姿勢、さらには異文化研究に必要となる高度な語学力の保持という側面は、本論文全体を通して十分に確認された。

審査員からは、フローレンツの日本研究の特徴として、蔑視という「他者に対する見くびりの視線」や彼の西洋中心主義的姿勢を挙げる際の一部に見受けられた性急さが指摘された。また、本論文に残された課題として、フローレンツが行った日本賞賛のポジティブな側面への考察、また19世紀末から20世紀初頭のドイツにおける文学思潮や植民地主義の展開等に関する更なる言及の必要性も挙げられたが、本論文がフローレンツ研究だけではなく、広く文化研究全般に対して新たな視点や学術的知見を提示し得たことに対して、また分析資料に向かう論者の真摯な姿勢に対して高い評価が下され、同時に論者の鋭い洞察力や研究者としての将来性がこの論文に示されているとの指摘もなされた。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。